

ぎゅうにゅう駅

(文：花岡大学 絵：平成21年度大淀高等学校美術部)

湖にのぞんだ小さな田舎町の電車の駅でした。

たったいま夜が明けたばかりです。

湖の上からまともに吹きつけてくる風はかなり強く、いたいほどの冷たさです。

風は駅の窓ガラスをガタガタゆさぶり、がらんとした駅前ひろばに、ひゅっと音をたてて吹きぬけていきました。

駅前の家いえは、まだどこも起きていません。

広場は、霜でまっ白でした。

家いえの屋根も、霜をかぶっていました。

待合室には、ブタのように肥った男と、モグラモチのようにでぶでぶした娘と、キリギリスのように痩せた女が、かたきのように黙りこんで、寒そうに電車を待っていました。

その寒々とした、一番電車の来るまでの、田舎駅のさむしさをけちらすように、そのとき、威勢のいいぎゅうにゅう^{しゅ}車の車輪の響きが、近づいてきました。

と、思っているまに、シマウマのように、元気のいいおっさんが、ぎゅうにゅう車を引っ張ったまま、待合室の中へ、かけこんできて、大きな声でききました。

「駅の兄ちゃん、一番はまだでんな？」

駅員室のガラス窓のなかで、金すじの駅長帽をかぶった、チンパンジーのような顔をした駅長は、その声が聞こえていながら、知らん顔をしていました。

すると、そばにつっ立っていた、キリンのように背の高いキップ切りが、怒ったように、言いました。

「そんなとこまで、車を入れたらいかんな。おっさん、乗るんかい？」

「わしは、乗らん。じゃが、車のなかの、百本のぎゅうにゅうは、載りこむぞ。」



「荷物は、あかん。」

と、キリンは手をふって、冷たく言いました。

「一番電車には、そら、孤児が収容されとる、わかき学園の、遠足の
団体が、百人も乗っとるから、荷物は、次の電車に載せてんか。」

「あほぬかせ。あつあつのぎゅうにゅうは、その百人の孤児に、飲んでもらうんじゃ。ぐすぐすいうな！」

張り切っている、シマウマの元気におされて、キリンは、目を光らせながら、黙ってしまいました。

そのあいだに、待合室のブタが、声えひそめて、今の今まで、かたきみたいに黙っていたキリギリスに、そっとささやきました。

「百本も注文があれば、このぎゅうにゅうやおやじ、朝っぱらから、えらいぼろい儲けをしよりますな。」

「ほんまに、そうだな。」

と、キリギリスは、何べんもうなずいてみせました。

人が、ぼろい儲けをするのをみるのは、ふたりとも、あまり好きではないようです。

キリンが、つつかつと出てきて、乱暴に、改札口を開けました。

すると、松林のおこうで、警笛がなって、やがて、クリーム色にぬった電車が、プラットホームに、すべりこんできました。

百人の孤児は、電車の窓に、鈴なりになって、ペンギンのように、外をのぞいていました。

それを見ると、シマウマは、「おう！」と、手をあげて、合図をし、「電車はん、ちょっと待ってくれよ。」

と、怒鳴っておいて、あわてて、五十本ぐくりのぎゅうにゅう瓶を、ふたつ、かついで改札口を通ろうとしました。

改札口が狭いので、手間取りました。

キリンは、まだ怒っていて、ここぞとばかり怒鳴りました。

「おはやく願います。おはやく、おはやく。」

「そないに急かさない。急いてはことをしそんずる、ちゅうことを知らんか。慌てんぼうめ！」

しかし、窓のペンギンたちから、わいわい言われて、シマウマは、たいへん慌てていました。

慌てていたので、プラットホームの打ち水が、つるつるに凍っているのに、ちっとも気が付きませんでした。

気が付かなかったから、うわっ、と言うなり、みごとに滑ってしまったのです。



みごとに滑ったから、あっと言う間もありませんでした。

百本のぎゅうにゅう瓶は、ガチャングチャんと、派手な音をたてて割れ、プラットホームは、たちまち、あつあつのぎゅうにゅうの海になってしまいました。

電車に乗り込んだ、フタとキリギリスは、なぜか、声をたてて笑いながら、うれしそうに、のぞいています。

キリンも、それみたことか、と言わぬばかりに、くすくすと、ひとりでわらっていました。

チンパンジーも、発車の合図をするのも、忘れていました。

でぶでぶのモグラモチの娘まで、笑っています。

ぎゅうにゅうの海に、座りこんだまま、シマウマは、すっかりしょげて、言いました。

「すまん、かにしてや。せっかくみんなに、喜んでもらおうと、楽しんどったのに。わやくそやわい。」

すると、窓から、ペンギンの先生が、大きな声で言いました。

「いや、うちの百人の子どもたちに、あつあつのぎゅうにゅうを、寄附してやろうとおっしゃる、あなたの暖かいお心だけで、飲ませてもらったのと、同じことです。ありがとうございます。」

その言葉につづいて、

「おじさん、おおきにありがとう。ごちそうさん、ごちそうさん。」

と、いつときにさけぶ、百人のペンギンの声は、笑っている人たちの笑いを、ぴたりと、止めました。

笑いを、止めただけでなく、その人たちの心を、強くうち、笑ったことを、後悔させました。

やがて、電車は、走っていき、百人のペンギンの声が、遠ざかっていくと、やけくそになって、まだぎゅうにゅうの海に座ったままでいる、シマウマのそばへ、かけ寄ってきたのは、チンパンジーとキリンでした。

「さあ、おっさん。はよ立たんと、かぜひきまっせ。」

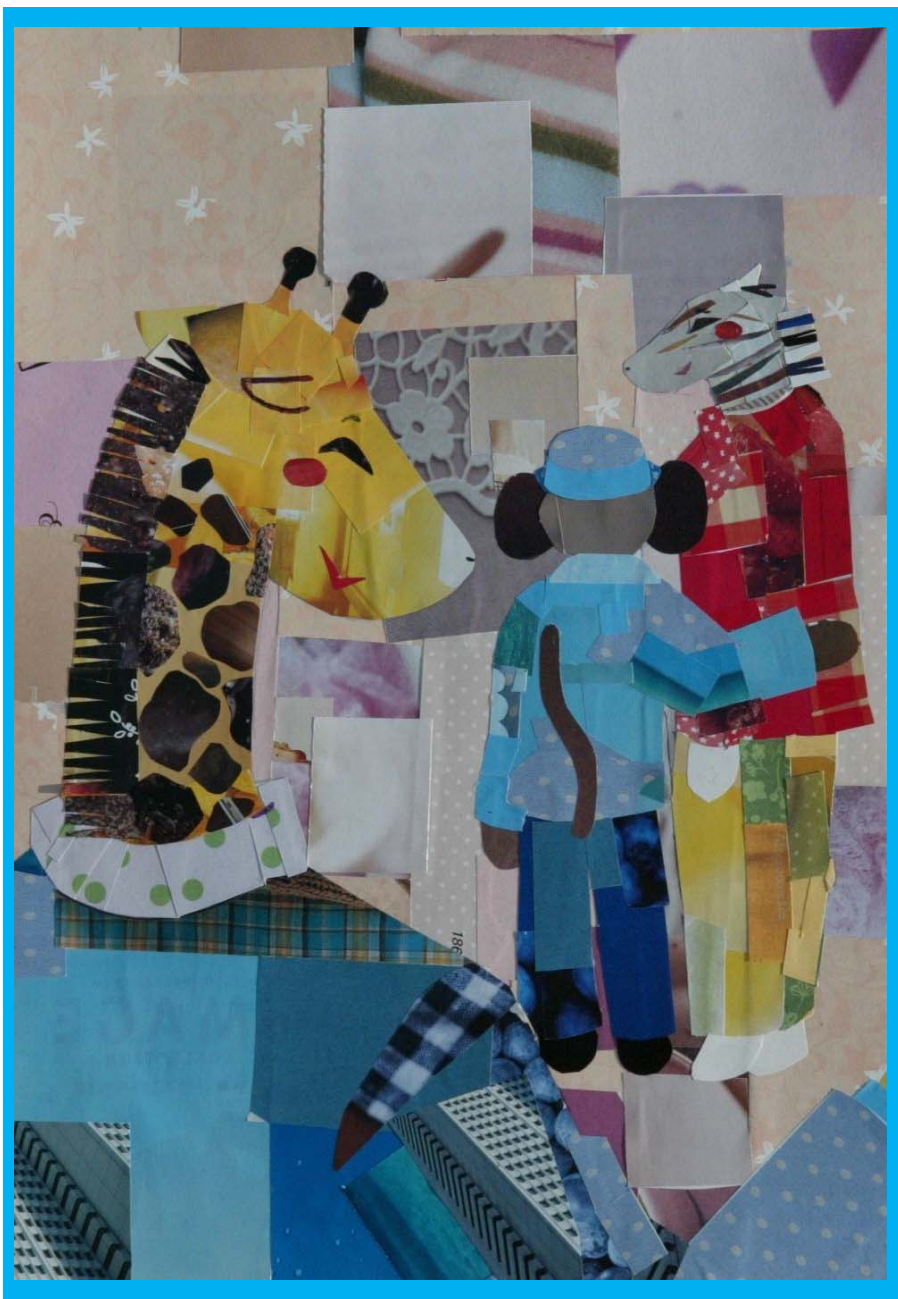
と、ふたりは、やさしく、シマウマを、助け起こして、言いました。

「さあ、駅員室のストーブで、濡れたお尻を、乾かしくなはれ。」

「おおきに、おおきに。」 おっさんは、もとの元気のいいシマウマにかえって、答えました。「そやけど、さきに、この割れた瓶の、あと片付けをしてから、行かしてもらいますわ。」

「何いうてなはんね、あほらしもない。」

と、キリンは、シマウマの背中を、駅員室のほうへ、押しやって、にこにこ笑いながら、言いました。



「あとは、ぼくにまかしていくなはれ。ぎゅうにゅうの匂いって、なんやら、こう、きゅっと、胸にこたえてきよって、ぼく、とても好きだんね。おっかあの匂いだすのやろか。なんやらこう、ええもんだんな。喜んで、あと片付け、させてもらいますわ。」